

習近平の歴史決議と喪失の記憶

中国共産党には3つの「歴史決議」がある。1つは1945年の毛沢東によるもの、2つ目は81年の鄧小平によるもの、3つ目が2021年11月に出来た習近平による「百年奮闘の重大な成果と歴史経験に関する決議」である。習の「歴史決議」には次の一文がある。

失われしものへの固執

「党の百年奮闘が根本から中国人民の前途・運命を変えた。近代以降、帝国主義、封建主義、官僚資本主義という三つの大きな山が中国人民に重くのしかかり、西洋列強から『東洋の病夫』という屈辱的な名をつけられた。百年にわたり、党は人民を指導して勇壮雄大で偉大な闘争を経て、中国人民が侮られ、抑圧され、奴隷の報いを受けた運命を断ち切り、国家、社会および自分の運命の主人公となった」(在日中国大使館)

米国と渡り合えるほどの力量を蓄え、2049年の建国100年には米国に追いつき追い越すと意気込むあの中国が、列強による中国分割の時代に味わされた屈辱

の記憶を呼び覚ませようというのである。喪失の歴史を再び繰り返してはならない。そのためには強国になるより他ない。すでに超大国となった中国がなお非妥協的な愛国ナショナリズムを発揚しているのである。

正論



拓殖大学顧問
渡辺 利夫

ばならない。

権力の正統性への懐疑

習の歴史決議においては、香港・台湾問題に関連する記述が非常に多い。香港・台湾問題の記述の背後に潜んでいる歴史意識とは、失われしものへの強い固執、喪失の被害者意識に他ならない。「戦狼」外交という、一見するところあの大国には似つかわしくない、いかにも猛々しい姿勢には、過去の歴史に対する怨念にも似た激しい反感が滲み出ている。

この反感が、世界における中国の政治経済のプレゼンス拡大、ならびにこれにもなって増長する尊大な自信と結びついた時に発せられる強大な国際権力に、日米

はともども向き合っていかなければならない。

香港は、中国の全国人民代表大会においてすでに採択され施行されている香港国家安全維持法により、中英合意によって定められた「一国両制の返還後50年維持」は実質的に空文化化してしまった。今後の焦点は台湾である。

05年に制定された中国の「反国家分裂法」の第2条では「台湾は中国の一部である。国は『台独』分裂勢力がいかなる名目、いかなる方式で台湾を中国から切り離すことも絶対に許さない」と明言された。

中国共産党は被害者意識に満ちた歴史認識を演出し、香港の「回収」と台湾の「解放」への意欲を前面に押し出し、それを押しとどめようとする米国への敵意を鋭き出しにしている。

これほどまでに歴史意識に固執するのには、もっと深刻で差し迫った理由が他にあるのではないかと考えねばならない。中国共産党権力の正統性に対する国民の疑念、いやひょっとして党幹部自身に潜在する懐疑の念がその理由ではないか。

建国以来80年にもなろうとしているものの、この間、共産党による統治の是非が国民に問われたことは一度もない。今後問われる見通しはまずない。共産党統治の正統性根拠を説明できないために、過去への怨念と愛国ナショナリズムを呼び覚まし、猛々しい戦狼外交を展開しているのである。

正統性が存在しないがゆえ

「党は終始世界的視野に立って人類の前途と運命を気につけて、人類の発展の大きな趨勢、世界の構図の大きな変化、中国の発展の大きな歴史から外の世界との関係を正しく認識、処理し、その中で開放を堅持して閉鎖せず、互恵ウィンウィンを堅持してゼロサムゲームをせず、公平を主張して正義を広め、歴史の正しい流れにそって人類の進歩をはかるといふ姿勢を貫いている」

香港の「一国両制」の息の根を止め、「一つの中国」を頑強に主張して台湾侵攻の拳に出る選択肢をちろつかせ、なお中国はゼロサムゲームをやらなないと公言しているのである。いかにも空疎な歴史決議ではないか。